

【入堂行列・旧約聖書日課】ゼカリヤ書 9章9～10節

- 9 娘シオンよ、大いに踊れ。
娘エルサレムよ、歡呼の声をあげよ。
見よ、あなたの王が来る。
彼は神に従い、勝利を与えられた者
高ぶることなく、ろばに乗って来る
雌ろばの子であるろばに乗って。
- 10 わたしはエフライムから戦車を
エルサレムから軍馬を絶つ。
戦いの弓は絶たれ
諸国の民に平和が告げられる。
彼の支配は海から海へ
大河から地の果てにまで及ぶ。

【入堂行列・福音書日課】マタイによる福音書 21章6～9節

- 6弟子たちは行って、イエスが命じられたとおりにし、7ろばと子ろばを引いて来て、その上に服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。8大勢の群衆が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は木の枝を切って道に敷いた。9そして群衆は、イエスの前に行く者も後に従う者も叫んだ。
「ダビデの子にホサナ。
主の名によって来られる方に、祝福があるように。
いと高きところにホサナ。」

【福音書日課】マタイによる福音書 27章32～56節

32兵士たちは出て行くと、シモンという名前のキレネ人に出会ったので、イエスの十字架を無理に担がせた。33そして、ゴルゴタという所、すなわち「されこうべの場所」に着くと、34苦いものを混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはなめただけで、飲もうとされなかった。35彼らはイエスを十字架につけると、くじを引いてその服を分け合い、36そこに座って見張りをしていた。37イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書きを掲げた。38折から、イエスと一緒に二人の強盗が、一人は右にもう一人は左に、十字架につけられていた。39そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスのものして、40言った。「神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」41同じように、祭司長たちも律法学者たちや長老たちと一緒に、イエスを侮辱して言った。42「他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう。43神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。『わたしは神の子だ』と言っていたのだから。」44一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをものした。

45さて、昼の十二時に、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。46三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。47そこに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「この人はエリヤを呼んでいる」と言う者もいた。48そのうちの一人が、すぐに走り寄り、海綿を取って酸いぶどう酒を含ませ、葦の棒に付けて、イエスに飲ませようとした。49ほかの人々は、「待て、エリヤが彼を救いに来るかどうか、見てみよう」と言った。50しかし、イエスは再び大声で叫び、息を引き取られた。51そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、52墓が開いて、眠りについていて多くの聖なる者たちの体が生き返った。53そして、イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた。54百人隊長や一緒にイエスの見張りをしていた人たちは、地震やいろいろの出来事を見て、非常に恐れ、「本当に、この人は神の子だった」と言った。55またそこでは、大勢の婦人たちが遠くから見守っていた。この婦人たちは、ガリラヤからイエスに従って来て世話をしていた人々である。56その中には、マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子らの母がいた。

主イエスの旅の終わり【こども説教のために】

主イエスが弟子たちと共に続けてきた旅を間もなく終えられることを、周囲の者たちは知っていました。その旅を終えるところ、エルサレムの町に入るために、主イエスはロバを用意させられたからです。それは、遠い昔の預言者が語っていたような、なさり方でした。戦うための馬に乗ってではなく、人々の生活に必要な荷物を運ぶロバに乗って来る者の姿。それは、戦いが終わり、平和が訪れることを示す姿でした。

ロバに乗って行かれた主イエスを待っていたのは、シュロの枝を振って平和の訪れを喜ぶ人々ばかりではありませんでした。日々、戦わずにいられない人々が、そこに待っていました。その人たちと、主イエスは、戦うこともできたのでしょうか。暴力を用いなくても、主イエスには、誰にも負けない道具がありました。「聖書の言葉」、「神の言葉」です。幼いときから「神の言葉」に親しみ、人の考えに優る神の御心を第一に考えることがおできでした。神の御心を持ってすれば、どんな人との論争にも負けることはなかったのです。けれども、人々がいよいよ主イエスを捕え、縛り、裁判にかけられたとき、主イエスは、もはや戦われませんでした。神の御心を告げて人々を言い負かすことさえ、なさいませんでした。ただご自身が、神の御心に従う者となられたのです。それが、旅の最後まで「神の子」として歩み抜くことだったからです。

「神の子」は、戦いに勝って人に仕えられるようになる者ではないのです。平和を実現するために皆に仕える者が、「神の子」なのです。

「本当に、この人は神の子だった」

「棕櫚の主日」から始まる「受難週」へと導かれて来ました。この週、教会は、主イエスのご生涯の最後の一週の出来事を記念いたします。「洗足」と「主の晩餐」を記念する木曜日、また、「十字架上の死」を記念する金曜日には、わたしたちの教会も、世界中の教会と共に、特別な祈りにあずかることができるでしょう。このときばかりは、日常の事々を脇に置いて、主イエスを記念する祈りに加わる者とされたいのです。

それは、いわば、わたしたちの看取りの営みなのです。ご生涯を終えられようとする主イエスを看取るための、祈りの営みなのです。そのときが近いことを皆が悟りながら、ある者は覚悟を決め、ある者は動揺し、ある者はそれに抗い、しかし、確実に訪れるそのときを待つ、看取りのときです。二千年前、弟子たちが主イエスの看取りのときへと連れ行かれた出来事を記念することを通して、わたしたちも、一人のお方、主イエスの看取りにあずかるのです。一人の人を看取るとはどういうことか、思い巡らすのです。

覚悟して看取りのときを過ごしながら、最期のときに立ち会えないということがあります。牧師として多くの方の最期の日々に立ち会い、またそのご家族と接してきた経験からすると、最期のときを家族の見守る中で迎えられるのはむしろ稀なことです。主治医から「今晚が峠です」と言われて、家族が入院先に集められても、深夜、いったん皆が自宅に引き上げたタイミングで息を引き取られるということも、少なくありません。まるで、家族がいなくなったときを見計らったようにして、静かにお一人でそのときを迎えられるのです。そうだとすると、最期の日々の看取りが無駄になるわけではありません。静かな看取りの日々が重ねられた先にこそ、平安に満たされた最期のときがあるからです。

主イエスの最期のときを、弟子たちは、立ち会うことができませんでした。十二人の弟子たちは、十字架の上で息を引き取られた主イエスの傍に、いらなかったのです。数時間前まで、四六時中、一緒にいたはずなのに、肝心なときに、彼らは傍にすることができませんでした。それでも、彼らの代わりに、最期のときの看取りをしてくれた人たちがいたのです。女たち。そして、百人隊長をはじめとする人々。彼らは、まるで医療現場のスタッフのように、主イエスの最期のときに立ち会って来ていました。それは、彼らにとっては日常業務の一つに過ぎなかったかもしれません。そうだとすると、その業務の中で見たことを、家族や親しい者たちに、心を込めて伝えてくれる者はいるものです。

「本当に、この人は神の子でした」。主イエスの最期を看取った百人隊長は、そう、主イエスの家族や身内の者に伝えてくれたのです。

《神の子》の十字架を担ぐ

「本当に、この人は神の子だった」。これほど、主イエスの最期の姿を伝えるのにふさわしい言葉は、他になかったのでしょうか。

確かに、主イエスは、「神の子として生きる」ことを生涯の目標として生きてこられた方だったのです。皆が、そのことを知っていました。十字架につけられた主イエスを見物に来た人々も、嘲って言ったのです、「神の子なら、自分を救って見しろ」と。「神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。『わたしは神の子だ』と言っていたのだから」と。裁判の席でも、大祭司に問われていました、「お前は神の子、メシアなのか」と。

主イエスは、神憑りになって「わたしは神の子だ」と主張されていたのではなかったのです。ただ、「天の父の子、神の子として生きる」ことを願い、真実にまっとうすることを求めて生きてこられたのです。

その歩みの初めには、あの荒れ野の誘惑がありました。四十日の断食をされたとき、主イエスは、近づいてきた者に問われたのです、「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ」(マタイ 4:3) と。神殿の屋根の端に立たされて、「神の子なら、飛び降りたらどうだ」(同 4:6) と。「神の子として生きる」とは、そういう力を得ることなのか、と。

「神の子ならば、どう生きるのか」。この問いを突き詰める旅を、主イエスは、弟子たちを伴って続けられました。弟子たちにも、神の子として生きる道を共に尋ね求めるよう、誘われました、「あなたがたの天の父の子となる」(同 5:45) ようにと。「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」(同 5:48) と。

弟子たちも、主イエスを「神の子として生きる者」と見ようとしてきました。湖を船で渡ろうとしていて、主イエスが湖面を近づいて来られるという不思議な体験をしたときには、思わず、「本当に、あなたは神の子です」(同 14:33) と言って、拝むこともしました。「あなたがたはわたしを何者だと言うのか」と問われた弟子のシモン・ペトロは、「あなたはメシア、生ける神の子です」と答え(同 16:15~16) てもいました。

弟子たちは、しかし、「神の子として生きる」ことをまっとうされた主イエスの最期に、立ち会えませんでした。「神の子」として十字架を背負われた主イエスに伴うことができず、その主イエスに伴わされたのは、キレネ人のシモンでした。十字架を代わりに担がされ、知らぬ間に、「神の子として生きた人」の生涯の終わりに立ち会わされたのです。

わたしたちも、「神の子」の十字架を代わりに担ぐよう、強いられるときがあるのです。それは、「神の子として生きるように」との誘いです。すべての者に対する呼びかけです。そのときを、天の父が備えてくださるのです。